障害児教育において音楽の教科書を有効に活用するにはどうしたらよいか

齋藤一雄（上越教育大学）

また、意図的な計画と実践の予測をももちながら実践に取り組んだが、実際に子どもたちとやり取りするなかで、予測を越えた子どもたちの反応がみられ、その反応は即応した教師の支援や働きかけが行われた。子どもの反映に合わせて音楽を即興的に変化させたり、見ることから聴くことに移行したり、音は消えることによって沈黙の世界にかかっていくことに気づかされたりした。

最後に、授業を行う教師が、対象となる子どもたちの実態に即して、明確な意図を持って、教科書の教材を選択していくことが重要である。そのときに「教科書解説」にある教材の活用例を参考にすることが有効であることが提案された。

2. 討論内容
「ベルシャの市場にて」はオーケストラ曲であるが、子どもたちの表現活動や活動に合わせることができるように、ピアノの生演奏で音楽を提供した。そのために、子どもたちの動きに柔軟に対応することがでていた。また、自分のベースで音楽表現を変え子どもの動きに即興的に音楽を変化させながら合わせていくことにより、自らは違う他者や音楽があることに気づくようにすることもできた。

また、「ベルシャの市場にて」には、情景や登場人物ごとにいくつかの音楽があり、その中から自分にあったものを選択できる教材となっている。そして、友だちとかわかりあいながら、器楽や身体表現によって曲全体を作り上げていく活動ができる教材であった。

そして、障害児の音楽の授業では、子どもたちの誰もが受け止められるような音楽やそれぞれ好きな音楽を用意することが必要であると討議された。

3. 今後の課題
障害児それぞれが受け止められる音楽や好きな音楽を用意するためには、一人一人の子どもにとっての心の動きや表現を教師がどう読み取っていくかが大事である。さらに、教科書や教科書解説等を活用し、子どもの実態に見合った教材をから見つけて、実践した結果を集めていくことが課題である。